

団体名	(公財)北九州国際交流協会	助成金名: 多文化共生のまちづくり促進事業	ジャンル
事業名	日本語教室を核とした共生の地域づくり検討事業		意識啓発・地域づくり

日本語教室を核とした共生の地域づくり検討事業

事業のポイント

◇「生活者としての外国人」のコミュニケーション支援の担い手として、日本語教室の存在は非常に大きい。そこで、外国人住民にとってより「安心でき、居心地のいい地域」となるよう、市内すべての日本語ボランティア教室の代表者等が集まる機会を創出し、ともに学び意見交換などを行うことで、多文化共生の地域づくりを推進していくための最初のステップとした。また、本事業を企画・実施する上で、進行の仕方やワークショップ等の手法を工夫することによって、繋がりがほとんどなかった日本語教室間で「顔の見えるいい関係づくり」が進むことも狙いとした。

事業の背景・目的

◇当協会は、外国人住民と直接関わりを持つ日本語教室には、「日本語指導」だけでなく「居場所の提供」や「共に地域に暮らす市民」としての活躍が大いに期待できると考えている。しかし、日本語ボランティアの関心は日本語指導のスキルアップへ集中していることや、他の日本語教室等との交流に対して積極的ではないことなど、当協会の意識と日本語教室の意識や実態にはズレもある。日本語教室と連携して「共生の地域づくり」を進めていくため、まずは建設的に対話を重ねていくための素地づくりとして、本事業を企画した。

事業の概要

- (1) 「第1回 関係者会議」実施 (11月9日 13:00~16:00)
 - ①前半: 公開講座 『生活者としての外国人』と日本語
 - 講師: 山下隆史 氏 (文化庁文化教育部国語課日本語教育専門職)
 - 講師: 神吉宇一 氏 (長崎外国語大学特任講師)
 - ②後半: 関係者会議 本事業の趣旨説明、会議参加者の団体紹介 (ワールドカフェ形式) ファシリテーター: 神吉宇一 氏
- (2) 「第2回 関係者会議」実施 (11月30日 13:00~15:00)
 - ①日本語教室での課題等についての意見交換
 - ②当協会が独自に作成したシミュレーションゲーム「ANADO」を使った意見交換 ファシリテーター: 神吉宇一 氏
- (3) 「第3回 関係者会議」実施 (1月25日 13:00~15:00)
 - ①「困っていること」、「さらに充実させていきたいこと」、「課題の解決方法」という視点でのグループディスカッション
 - ②生活情報を外国人に提供していくためのツールや、他地域における「生活者としての外国人」に対する先進的取組などの紹介
 - ファシリテーター: 矢野花織 氏 (北九州国際交流協会)
 - ゲストスピーカー: 石井丈司 氏 (株式会社ラーンズ)
- (4) 「第4回 関係者会議」実施 (2月1日 13:00~15:00)
 前回の会議で出た課題の論点整理 講師: 神吉宇一 氏
- (5) 「第5回 関係者会議」実施 (2月2日 14:00~17:30)
 「生活者としての外国人によるおしゃべり発表会」において、関係者会議参加者の有志らで、日本語教室紹介パネルを展示
- (6) 「第6回 関係者会議」実施 (2月15日 16:30~18:30)
 関係者会議出席者以外の外国人やボランティアとの交流の場
 - 前半: 座談会 「わたしたち日本語『ゼロ』から始めました」
 - スピーカー: 外国人市民 (4名)
 - 後半: 交流会



公開講座



シミュレーションゲーム「ANADO」

事業実施における工夫点・事業の成果等

(1) 工夫した点

市内の日本語ボランティア教室が一堂に会する初の試みであったため、日本語教育に関する経歴や資格の有無にとらわれず、日本語ボランティアや協会職員が「対等」な立場で意見交換や情報共有が行えるよう、外部講師やゲストスピーカーを招いて参加者全員が共通認識を持った上で意見交換ができるよう配慮した。また、少数意見も拾い上げられるよう、外部のファシリテーターに参加してもらったり、事前にアンケートをとった上でグループワークのテーマを決めたり、今回のために独自に作成したシミュレーションゲーム

「ANADO」（意見交換を通して課題解決のプロセスを体験するゲーム）をワークショップで使用するなど柔軟に進めた。

(2) 事業の成果

これまでの教室の聞き取り調査やアンケート調査からは、窺い知ることはできなかった各日本語教室の実態が浮き彫りとなった（例：「多文化共生」や「外国人支援」に関する関心の度合い、外国人学習者のニーズの把握状況、協会に対する日本語教育事業への期待と本音など）。また、これまではA4サイズ2枚程度の「日本語教室リスト」を協会が作成・配布をしていたが、本事業をきっかけに「緊急時（災害・医療など）の情報」と「各日本語教室の特色紹介」（教室情報やボランティア・外国人学習者の声など）を1冊にまとめた冊子を作成し、新たに北九州市民となった外国人等を対象として区役所で配布することになった。



関係者会議

今後の課題・将来に向けての展望等

「連携・ネットワーク」に興味を持つ教室が増え、今後も市内の日本語教室について意見交換をしたいという意見が多数出たことは、「地域づくり」という観点からは一つの成功であると言える。しかし、一つ一つの教室、年齢、日本語教育の資格の有無、ボランティア経験年数、職歴（ポジション）などによって、どのような形で「連携」をしたいのかや、そもそも「連携」の定義が全く異なっていることが見えてきたので、日本語教室を核として共生の地域づくりを進めていくためには、対話を繰り返していくことが必要である。本事業では、日本語教室間および協会と日本語教室の関係づくりを行い、互いの役割を



グループディスカッション

確認し合いながら、「共生の地域づくり」という目標の共有を最初のステップとした。日本語教室は設立経緯や活動目的が異なっているが、教室の中には「日本語の指導」だけでなく「地域住民として外国人住民を支える役割」（居場所の提供など）へと教室運営についての考え方が広がったということもあり、今後に期待したい。

事業担当者のふりかえり

⇒ 外国人住民が集いやすい場所で行われている日本語教室(全 13 教室)は、外国人散在地域である北九州において「共生の地域づくり」の核となりうるのではないかとこの仮説のもと、その第一歩として本事業を企画した。上述のとおり事業を振り返ってみると、成果以上に新たな課題も多数見え始めてきて、一朝一夕ではいけない難しさを実感している。一方、思いがけない効果として、本事業において「日本語教室の考え方や背景が違っても、効果的に話し合いが進むように」と、数ヶ月をかけて開発したワークショップのツール「ANADO」が様々な「日本語ボランティア講座」等において、好評を奏している。事業の副次的成果ではあるが、今後、他の地域においても、活用していただけるように、更に改良を重ねていきたい。